

えほん👑世界のおはなし

そんごくう

于大武●絵 唐亜明●文



<著者紹介>

于 大武 (う たいぶ)

1948年北京生まれ。北京中央美術学院に学ぶ。現在、中国美術出版総社の児童月刊誌編集長。中国美術家協会会員。1989年第6回野間絵本原画コンクールで大賞を受賞。絵本に「ナージャとりゅうおう」(講談社、第22回講談社出版文化賞絵本賞)「西遊記」(講談社、第48回産経児童出版文化賞)「十万本の矢」(岩波書店)などがある。北京市在住。

唐 亜明 (とう あめい)

1953年北京生まれ。83年来日。早稲田大学文学部卒業、東京大学大学院修了。現在、出版社編集者のかたわら、東洋大学、早稲田大学で非常勤講師を務める。主な著書に「ビートルズを知らなかった紅衛兵」(岩波書店)「翡翠露」(TBSブリタニカ、第8回開高健賞奨励賞)絵本に「ナージャとりゅうおう」(講談社、第22回講談社出版文化賞絵本賞)「西遊記」(講談社、第48回産経児童出版文化賞)「ちょうちんまつり」(福音館書店)などがある。東京都在住。



えほん世界のおはなし①⑦
そんごくう

・N.D.C.726 32p 26cm

2000年2月1日 第1刷発行

絵◎于 大武 (う たいぶ)

文◎唐 亜明 (とう あめい)

A D◎坂川栄治

デザイン◎藤田知子 (坂川事務所)

発行者◎野間佐和子

発行所◎株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-8001

電話／東京03-5395-3534 (編集部)

東京03-5395-3625 (販売部)

東京03-5395-3615 (製作部)



印刷所◎共同印刷株式会社

製本所◎大村製本株式会社

©Yu Dawu/Tang Yaming 2000 Printed in Japan (児幼)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にておとりかえいたします。なお、この本についての
お問い合わせは児童局幼児図書出版部あてにお願いいたします。
本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN 4-06-267067-4

えほん👑世界のおはなし

そんごくう

于大武●絵 唐亜明●文

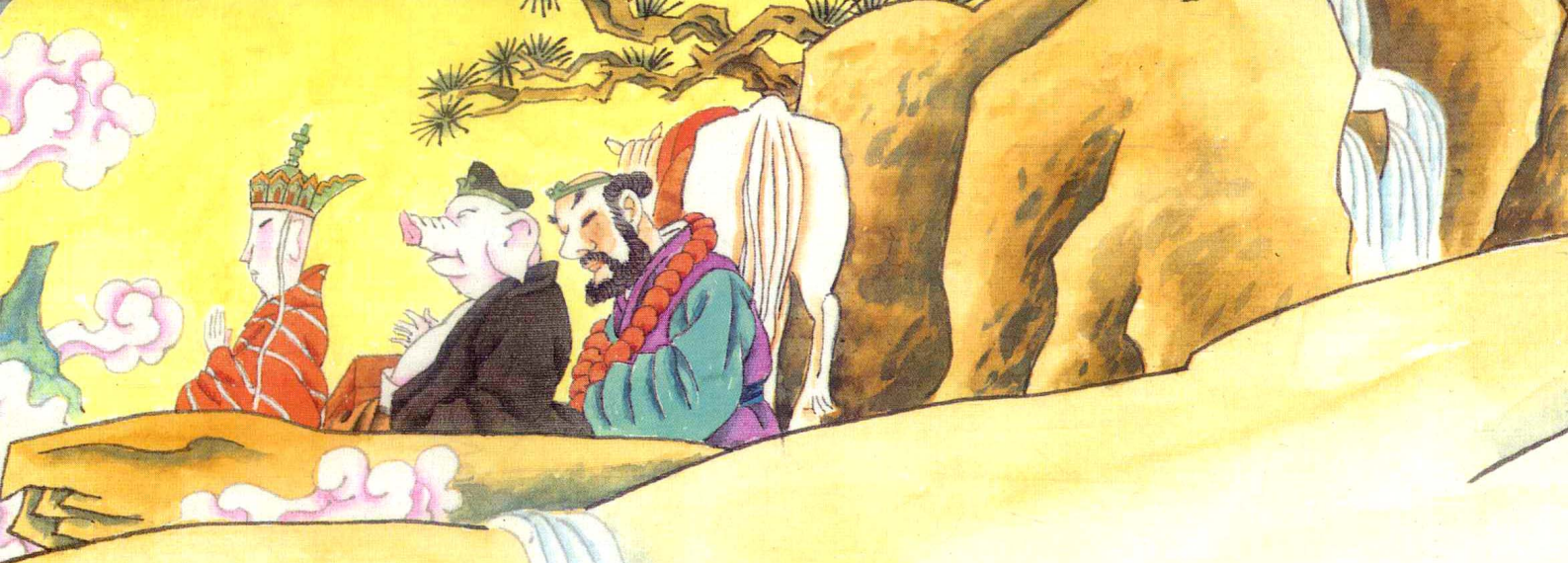




そんごくう



そんごくうは、ちょはっかい さごじょうと ともに、さんぞうほうしを
まもって、山を ^{やま} こえ、川を ^{かわ} わたり、^{なが} 長い ^{なが} 長い たびを つづけて
います。おしゃかさまの おきょうを いただく ために、とおい ^{にし} 西の
^{くに} 国へ いくのです。

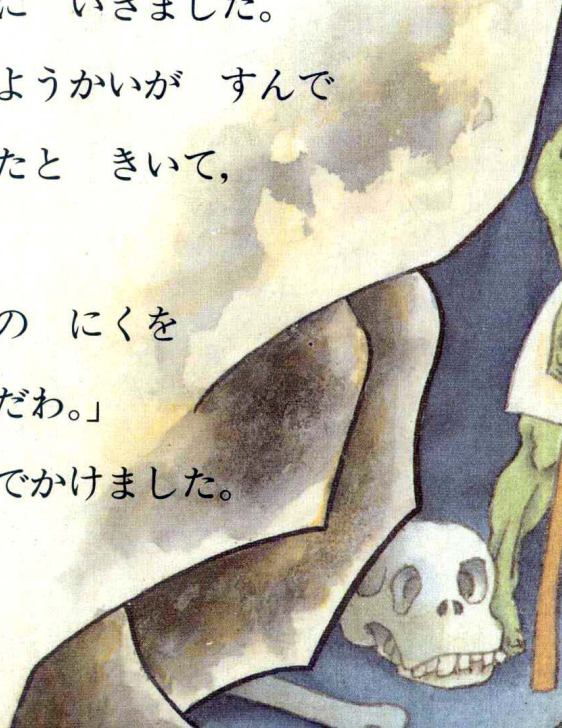


ある ^ひ日, そんごくうたちは ^{たか}高い ^{やま}山の ふもとに やって きました。
「ごくう, まる一日 ^{いちにち} なにも ^{くち}口に して いないから, おなかが すいて
きたな。」と, さんぞうほうしが いうと,
「それでは ここで まって いて ください。」

そんごくうは ^{くも}雲に のって, たべものを さがしに いきました。
けれども, この ^{やま}山には, はっこつせいと いう ようかいが すんで
います。ようかいは, さんぞうほうしが やって きたと きいて,
たいそう よろこんで いるのです。

「いい ところに きて くれた。あの おぼうさんの ^{ひとくち}にくを
一口でも くえば, いつまでも ^{とし}年を とらないそうだわ。」

はっこつせいは, さんぞうほうしを つかまえに でかけました。









はっこつせいは わかい むすめに ばけて、さんぞうほうしの まえに
あらわれました。たべものの たっぷり はいって いる かごを、^て手
もって います。ちょはっかいが むすめを みて、^{こえ}声を かけました。

「おねえさん、どちらへ おでかけですか。かごから おいしそうな
においが して いますね。」

「ああら、みなさんに めしあがって いただこうと おもって、
にくまんを おとどけに まいりましたのよ。」

ちょはっかいは うれしく なって、かごに ^て手を のぼそうと しました。

ちょうど その とき、そんごくうが もどって きました。





「ばけものめ！ おれは だまされないぞ。この によいぼうを くらえ。」

ぼーん。そんごくうの によいぼうが ふりおろされました。

はっこつせいは とつさに むすめの にせの ^{したい}死体を よこたえて、じぶんは
にげさりました。





さんぞうほうしは おどろいて ぶるぶる
ふるえだしました。

「この さるめ、なんと いう ことを
するのじゃ。わけも なく ^{ひと}人の
いのちを うばうとは！」

ちょはっかいも いいました。

「そうだよ。やさしそうな むすめだったのに。
ようかいと きめつけて、うちころして
しまうなんて ひどすぎるじゃ ないか。」

さんぞうほうしは そんごくうの ^{あたま}頭を
しめつける じゅもんを となえはじめました。

「いたい、いたい！」と そんごくうは ^{あたま}頭を
かかえて、^{張鳴}ひめいを あげました。

「おまえのような ものが、おしゃかさまの
おきょうを もとめて なんに なろう。
さっさと さるが よい。」

その とき、つえを ついた おばあさんが
やって きました。

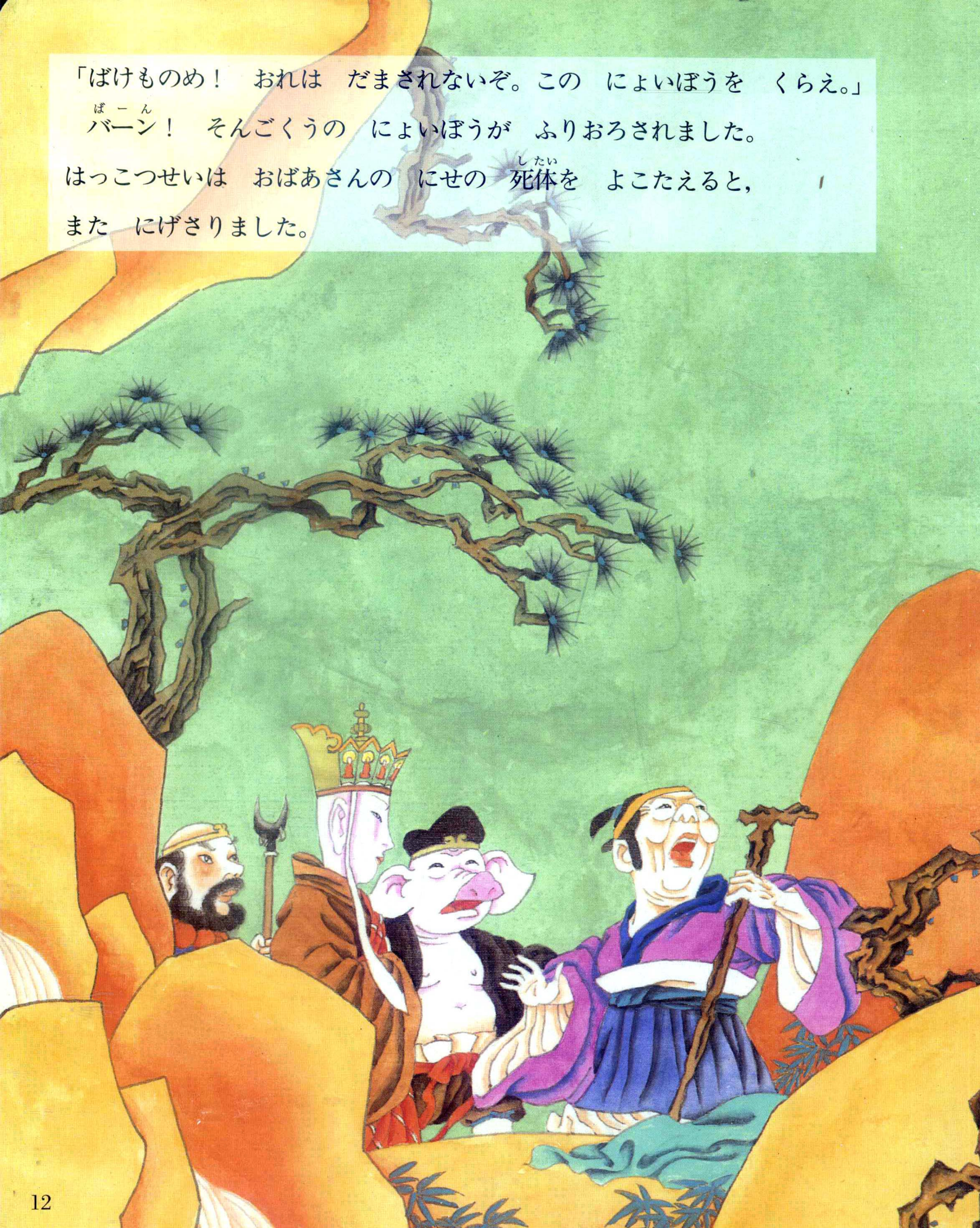
「こりゃ たいへんだ。ごくうが ころした
むすめの おっかさんだよ。」

ちょはっかいが ^{こえ}声を あげました。

「ばけものめ！ おれは だまされないぞ。この によいぼうを くらえ。」

ばーん！ そんごくうの によいぼうが ふりおろされました。

はっこつせいは おばあさんの にせの ^{したい}死体を よこたえと、
また にげさりました。





おどろいた さんぞうほうしは、もう ゆるせぬと、じゅもんを
くりかえしました。

「いたい、いたい！」

そんごくうは ^{あたま}頭を かかえて ひめいを あげました。

「おまえは どうして ^{いち}一どならず ^に二どまで つみも ない
^{ひと}人を うちころしたのだ。もう おまえとは いっしょに いられない。

さっさと さるが よい。」

その とき、さごじょうが いいました。

「ごくうが いなく なったら、とても ^{にし}西の ^{くに}国には たどりつけません。」

さんぞうほうしは しかたなく、こんどだけは ゆるす ことに しました。



